

中国軍演習場内の模擬目標

漢和防務評論 20151002 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

来年の台湾総統選挙は、現在の国民党に不利と言われていますが、中国は台湾の対中政策が激変するのではないかと憂慮しているようです。

中国は、総統選挙の前になると、弾道ミサイルを台湾近海に発射したり、台湾民衆を軍事的に威嚇する行動を採ってきました。そのたびに米国空母艦隊が中国近海に接近し、中国の暴挙を抑制する対応を採ってきました。

今回は、南シナ海での対立と台湾総統選挙がリンクして中国に対する圧力が倍加することになります。中国はどのような対応を採るのか。ことを起こせば、一挙に反中国勢力が結集することになるため、軽挙妄動は中国にとって大打撃となりましょう。

中国は、台湾に対する軍事的威嚇の一環として 2014 年以降、演習場内に台湾総統府の模擬目標をつくり、市街戦の訓練を行っているようです。

KDR 平可夫バンコク特電：

北京は、台湾の政権交代の可能性に対し相当神経質になっているようだ。今年になってから、軍の刊行物や文献中に、台湾海峡の政治情勢の変化及び軍事的対処の方法に関する研究記事が明らかに増加している。この 4 月以降、中国は、大量の”学者”を香港に派遣し、来年の台湾総統選挙後の国民党及び民進党の対中政策の変化を探ろうとした。”学者達”の実際の身分は、大部分が軍及び国家情報機関出身者であった。香港の親中国の”学者”及びメディアは積極的に協力し、多種類のチャンネルを通じて台湾政局の変化を探った。

KDR は、台湾総統府だけでなく、台北の交通網及び重要戦略目標を模擬した建築物が中国軍演習場内に造られ、市街戦訓練場になっているのを最新の衛星写真を通じて確認した。北京、南京及び済南軍区の陸軍総合演習場を縦観すると、相当数の台湾の模擬山地目標が製作されている。

上述各大軍区の総合訓練基地の模擬作戦地区を縦観すると、陸軍作戦の形態が大きく変化していることが分かる。冷戦時代に頻繁に演練されたのは、ソ連軍に対する対戦車集団軍作戦であった。しかし現在これが主要戦法ではなくなった。代わって大規模な海島上陸作戦、山地、丘陵地帯の作戦が陸軍演習の重点になった。

例えば、7 月中の報道に出現した朱日和（内蒙古にある中国陸軍の総合訓練場）に造られた”台湾総統府街区”の模擬建築物がその典型である。これは台湾総統府付近の市街戦訓練に使われる。この”総統府”の建物は、この 7 月、中国中央テレビ **CCTV-7** の軍事チャンネルに登場した。このことで、中国が、対台湾政策で如何に

焦っているかが分かる。しかも（台湾総統選挙に際して習慣となっている）台湾に対するあからさまな軍事的威嚇が始まった。

衛星写真によると、中国は、総統府だけでなく、周囲の建築物、道路まですべて模擬している。模擬されたエリアは、凱特格蘭道、総統府正面前方左右の2つの停車場、重慶南路、台湾外交部に類似した建築物を含む、公園路、中山南路等々である。CCTV-7の画面をKDRが詳細に分析したところ、建設された”総統府”の模型は同じ5階建であった。この演習は、”跨越2015”と称した。赤軍部隊は、27集団軍で、青軍部隊は、旅団級であった。實際上、”台湾総統府”が中国軍演習に登場したのは1回だけでなく、”朱日和B”演習では、侵攻作戦を演練し、中国陸軍は大量の煙幕を展開して総統府に接近した。もう一つのニュースはCCTV-4の番組に登場した。2回の”総統府”攻撃演習から、中国軍が台北で市街戦を行う意図が見える。それは最初に総統府を撃破するためである。台北の実際の総統府の建物の大きさは、長さ128 m、幅68 mである。朱日和の模擬”総統府”の大きさは、長さ127 m、幅65 mである。前者は、日本の植民地時代に建設されたもので、未だ建物の正確な寸法は公表されていない。したがってKDRは、中国軍が衛星写真を基にして寸法を測り模擬建築物を建設したものと考えている。

そのほか、一都市の市街戦用模型が相当大型化している。高速道路や建築物の模型は長さが800 mに達し、しかも上述の模型は2015年になって拡大されつつある。KDRは、この場所が台北市内の某所である可能性が極めて高いと考えている。建築群が直接”台北総統府”に連なっている。このほか”高速道路”は、立体式橋梁が建設されている。砂漠戦の訓練基地であれば、このような立体式高速道路の橋梁は必要ない。”総統府”の7時30分に方向には、2014年から新たな飛行場が建設されている。滑走路の長さが1200 mで、Y-7及びY-8輸送機が着陸できる。

兵舎地区全体に大量の戦車、装甲車両、自動車が並び、その長さは3 kmに達し、その規模の大きさが分かる。正規師団の模擬訓練も十分できる大きさである。また陸軍ミサイル旅団の司令部に酷似した建築物を含め、新たな施設が大量に建設中である。2009年以降、中国陸軍は、短距離弾道ミサイルの配備を開始した。ヘリポートが2箇所あり、1つには37個の駐機スポットがある。これは1個陸軍航空兵旅団のヘリ数に等しい。訓練基地全体の燃料タンクの数も17個以上ある。

社会主義国家の中では北朝鮮だけであるが、平壤の金正日政治軍事大学内には、ソウルの市街地と同じ規模の大型模型があり、労働党の対外情報部及び社会文化部の特殊工作員の訓練に供している。

2014年から朱日和に”台湾総督府市街地”模型の建設を開始したことは、2016年以降の台湾海峡情勢の変化を中国が極めて恐れていることを意味している。しかも軍事的に所謂”軍事闘争準備”を進めている。

朱日和は、元来北京軍区の訓練基地であった。しかし2011年以降、陸軍全軍の聯合作戦基地になった。このことから中国陸軍の台湾に対する注力度が分かる。近年来、主に市街戦用の訓練施設が増加した。2014年には、山地戦訓練センターの建物建設が逐次完了するとともに、現地の貯水ダムの利用も始まった。ダムを利用し

て陸軍の聯合上陸作戦を演練しているのであるか？今後注意する必要がある。

（対中融和政策を採った馬英九政権時代においても）中国軍は、台湾への作戦準備態勢を緩めなかったことがこれで分かる。KDR は、現在までに鼎新飛行場に建設された台湾の” 清泉崗基地” の模擬基地及び演習状況を何度も分析してきた。これは、中国空軍が対台湾作戦を演練する基地であると。この” 模擬飛行場の滑走路” 及び付近に設置された大量の攻撃目標は、誘導爆弾攻撃を反復演練し効果を判定するためのものであった。内容は過去に何度も報道したのでここでは省略する。

第二砲兵の射爆撃場

青海省にある第二砲兵の射爆撃場では、2013 年に F-15 戦闘機のエプロンと送電線を模擬していた。これは、第二砲兵による飛行場に対する弾道ミサイル攻撃の効果を評価するためのものであった。大量の模擬送電線は、台湾及び沖縄の発電所に対する炭素繊維弾攻撃を模擬するためのものである可能性が最も高い。中国は、炭素繊維弾の輸出を始めた。このほか以下に述べる最新の模擬目標には注意する必要がある：

航空機格納庫が直撃を受けている。精確な攻撃効果から判断すると、これは第二砲兵の巡航ミサイルによる攻撃である可能性が極めて高い。レーダー基地に対しては、第二砲兵は反輻射弾頭を開発し、レーダーステーションを攻撃する。1000 m の滑走路に対して実施した攻撃は精確に滑走路に命中した。

これらの動向から、第二砲兵の攻撃精度は高く、CEP は 30 乃至 15 m 以下と見られる。このように短距離弾道ミサイルの攻撃精度が高いのは、明らかに終末誘導システムを取付けたためである。更に多くの弾頭が訓練され、実戦配備されている。ミッドコース段階で GPS 誘導+慣性誘導する輸出型短距離弾道ミサイルの CEP は 30 m 以下である。

南京軍区

南京軍区の三界合同演習基地を詳細に分析すると、主要な作戦意図が分かる。相当大きな演習場であり、延々 17 km 以上ある。演習区域は明らかに台湾の丘陵地形及び山地地形を模擬している。しかも丘陵、山地には大量の防御工事、坑道を設け、攻防演習を行っている。演習場内には各種のヘリスポットがあり、陸軍の台湾山地、丘陵地帯へのヘリによる侵攻作戦を演習している。

興味深いことは、どの軍区の総合演習場にも様々な大きさの貯水ダムがあることである。陸軍武装兵士の水中訓練のためであろうか？それにしても船舶が見当たらない。

このように見ると、中国軍演習場に若干の質的变化があることは明らかだ。元来、各軍区はそれぞれ大型の一体化演習基地を保有し、当該軍区内の師団級部隊の全体訓練に利用してきた。現在は、全軍のための分業方式、共用方式を取り入れている。朱日和の地形の模擬状況は完璧であるが、三界基地には市街戦訓練が出来るような

模擬区域は発見できない。したがって市街戦演習は、朱日和の施設を共同使用し、山地、丘陵作戦の演習は、その他の軍区も三界の訓練施設を使用するようになった可能性がある。

濟南軍区

濟南軍区の確山訓練基地は、山地、丘陵、濠溝、貯水ダムを背景とした作戦訓練の総合基地である。ここには多くの仮想目標は建設されておらず、濠溝、河谷、少なくとも 2 個以上の貯水ダムがある。今のところ確定出来ることは、同軍区の青軍に扮する部隊は第 20 集団軍の旅団級部隊であることだ。基地全体が駐馬店と確山県城の間の西部山地にあり、確山以南の 30 km に明港へり飛行場がある。

丘陵、山地作戦演習基地として確山基地は如何なる特徴があるか？過去の演習例から見ると、中隊、小隊の特種対抗演習が最も多い。したがって確山演習基地は特種部隊の演習基地である可能性が高い。確山県の多くの地方ニュースを分析した結果から判断すると、この演習場内に濟南軍区特種作戦訓練基地が設立され、経費節減のため”国防教育園”と名付けられ、対外開放されていることが分かった。薄山湖上には、水上特種部隊訓練基地が建設された。

2016 年に国民党が政権を失う可能性が高まるにしたがって、今後、中台双方の軍事的対立の度合がますます増大する、と KDR は判断している。

以上